

パスカル『パンセ』における「沈黙」のテーマ研究：セリエ版断章 S. 132

江川 裕士

Une étude thématique du « silence » dans les *Pensées* de Pascal à partir du fragment S. 132 (éd. Sellier)

EGAWA Yuto

はじめに

哲学的関心から『パンセ』を紐解くとき、人間がたびたび聴覚的モデルで描かれながら、その登場回数が少ないことは注目に値する。例えば写本に残された所謂「1658年6月の企画」構成における前半部（哲学批判・人間学）が後半部（宗教論）へと移行していく決定的場面で現れるのは、「沈黙」とその他の重要主題との連関である（セリエ版『パンセ』断章233番「無限の空間の永遠の沈黙が私を恐れさせる」S.233）¹。しかし「沈黙」の語が用いられるのは『パンセ』全体ではごく稀であり、計六回である²。他にも人間学的考察の過程で「聴く（écouter）」・「内的会話（conversation intérieure）」といった言葉と共に現れる用例があるが、その考察の成果が果たして他の議論に活用されているのかどうか、明らかではない。ではこうした考察は、『パンセ』において二次的な主題に過ぎないのだろうか。それとも、何か理由と由来があって発案され選択された、特異な人間表象なのだろうか。

本稿では、「沈黙」に言及した六つの断章の中でも唯一人間学的部分に配置されている S. 132 を取り上げ、人間が「沈黙して」何かをされるといわれることの意味と特異性を考察する。

第一節 断章 S. 132 の二つの主題解釈

セリエ版『パンセ』編纂者のフィリップ・セリエは、断章 S. 132 が全て一枚の同一紙片に記されていることに注目し、全体をまとめて一つの断章とする番号（S. 132）を割り振っている。しかし、セリエ以外の近代版『パンセ』の編者たちは、この断章を多くて三つに切り分けた³。そこで次の引用以下、本稿では全体として断章 S. 132 を紹介しながらも、学説に

従ってその内部に「断章 98」、「断章 99」、「断章 99 の 2」と別々の番号を併記した上で、全体の解釈を進める。以下がその断章 S. 132 である。

〔断章 98〕 どうして我々は足の不自由な人 (boiteux) には腹を立てないのに、精神の曲がった人 (esprit boiteux) には腹を立てるのか？ 何となれば足の不自由な人は我々が直立して進むとわかっており、精神の曲がった人は、曲がっているのは我々の方だと言うがゆえに。この発言がなければ我々も彼らを哀れんで、怒っていなかっただろう。エピクテトスはそれゆえ強く尋ねている。なぜ我々は頭が痛いねと言われて憤慨せず、筋の悪い推論や選択をしたと言われると憤慨しているのか。

〔断章 99〕 その原因はといえば、我々が頭痛でなく、またその足も不自由でないことは確かなのに、真を選んでいるのだとはそれほど確信が持てないからなのだ。それで、我々の確信はその選んでいるものを我々が全力の眼差しで視ているということにしか由来しないとなると、ある他人が全力の眼差しで反対のものを見ている時には、その状況が我々を迷わせ驚かせるのである。さらに他の千人もの大勢が我々の選択を一笑に付す時にはなおさら〔我々は迷い驚くの〕であるが、それというのも人は自らの光明を他の大勢の光明に増して好まねばならぬからである。そしてこれが大胆かつ困難なことなのだ。この矛盾は足の不自由な人 (boiteux) に関する諸感覚の中には一切ない。

〔断章 99 の 2〕 人はこうして愚かだと言われてそれを信じさせられる。また同じことを我々は自分自身に言って、自分は愚かだと自らに信じさせる。それも人は彼だけで内的会話をしているからであり、これをよく統御する (régler) ことが重要である。「悪しき交際は善き風儀を損なう」。できる限り沈黙に留まらなければならず、我々が真理であると知っている神とだけ対話するのでなければならぬ。そうして我々はこれ〔という真理〕を自分自身に説得するのである。⁴

実際この断章は、二つの主題を含んでいると解釈するとわかりやすい。前半部でパスカルが主題的に取り上げるのは、人間をほとんど必ず憤慨させるようなある特殊状況、すなわち、精神的機能を非難されるような状況である。この怒りの重要な契機となるのは、ある人々が我々の精神の働きの不備や不調を指摘して語る言葉であり、我々の主張とは異なる「真」を標榜する語りである。これらの言葉を聞いて、我々は自分の選択や推理の確かさ、そしてこれを保証してくれるはずの自らの精神機能の健全さに不安を覚えるようになる。怒りの原因は、他者の言葉を契機として、こうした不安に我々が直面させられるという事態である。パスカルは、以上のように怒り・憤慨する人間を描写したモンテーニュとエピクテトスには

賛成し依拠しながらも、両者がその原因を十分に考察しなかったことには異を唱えている。その議論の過程でパスカルは反論を重ね、まず視覚・バランス感覚といった感覚に比べて精神の方はいつも理路整然としているという発想や、さらに個人は他人の精神に依拠して物事を判断してもよいという発想にも異を唱えている。

二つ目の主題は、自己説得の方法である。この方法は第一の考察結果を利用して展開される。第一の考察によれば、人間精神における真なるものの在り方は他者の言葉に依存しているのだった。パスカルはこの考察をさらに脇道に逸らし、自分の言葉でさえも精神に影響すると述べる。つまり、内的会話の原理である。この原理ゆえに、真らしい事柄（正しい自己イメージや選択の対象）が真だと精神的に「知る」だけでは、人間はその事柄に確信を持っていないことが洞察される。当の事柄との関係を、確かに維持することができないのである。しかしパスカルは、人間がすでに真だと知った事柄に対し確信を育み、また第一の考察における怒り・憤慨の原因から自らを解放するための方法は他に残されていることを示唆する。この箇所ではパスカルが反論しているのは、人間には自己説得の方法がない、真を確信することは絶対に叶わないといったシニシズムであるように思われる。パスカルは、諸感覚から与えられる確信には、無矛盾性・独立性が備わることを認める。感覚的な確実性であれば、言葉の影響を被る心配はないのである。その上でパスカルは、同様の性質が方法的手続によっては、必ず精神機能にも備わると構想しているように思われる。その手続の一つが、外的な静寂を守り、内的にも沈黙し、神とだけ対話すべしと言われている事柄に相当するだろう。

さて、ここで二つの疑問が生じる。第一に、パスカルが残した紙片のまとまりを重視して第一と第二の主題を連続して読むなら、我々はどうな連続性を両者に認めるべきなのか。第二に、この断章を配置したファイル A5「現象の理由」で展開される思想構造のどこに、S. 132 の第二主題における主張（人間には自己説得の方法がない、真を確信することは絶対に叶わないという説に対する反論）を位置付けるべきなのか。一般に『パンセ』の断章を解釈するためには、その断章を書き記した紙片が紐付けられていた紙片集（ファイル）のタイトル・主題を手掛かりにすることが有効である。断章 S. 132 紙片はファイル A5「現象の理由」に紐付けられていたので、この主題が展開する思想と断章 S. 132 の関係は解釈上の問題になる。「現象の理由」の意味は次節で詳しく検討するが、中でも「正から反への絶えざる転換」とパスカルが呼ぶ、意見の転換運動は特に有名である。ではパスカルは、断章 S. 132 の紙片を「現象の理由」に紐付けた時、沈黙と神だけとの対話にかかる規範的言明を、この「転換」運動に巻き込んでさらに反転させ否定しようと構想していたのだろうか。それともパスカルは、その言明をこれ以上「転換」しないように固定して、そのような絶対的な規範を必要とする他の主題と関連付けようとしていたのだろうか。例えばブランシュビックは、後半三分の一（「断章 99 の 2」の部分）だけを切り取ってキリスト教の「道徳と教義」に結びつけ、パスカルの黙想録「イエスの秘義」（B. 553）の手前に配置した。この解釈に従えば、「断章 99 の 2」の箇所（B. 536）は内容的には黙想の前準備なのだと考えやすくなる。

これらの問いに答えるため、以下、まず次節で「現象の理由」の意味と構造をフリゴやメナールの学説を参考にして解釈した上で、次に、第三節で上記の問いを考察する。

第二節 「現象の理由」

「現象の理由 (Raison des effets)」は、「現象を見る」ことと、その「理由」を発見し提示することの二段階に分けて説明することができる。研究上、別ファイルに置かれた断章 S. 480 が示唆的である⁵。この断章は、パスカルに先行する作家たちは「現象は見たが、その諸原因は見なかった」のだと主張する過程で、「現象を見る」とはどういうことなのかについて手掛かりを与えている。なお「現象 (effets)」という訳語は前田の提案に従った。前田によれば、パスカルの時代の近代物理学に「結果 (resultats)」ないし「結果の原因 (cause des resultats)」という言い方は日常的ではなかった。そのため、日本語では「現象の理由 (raison des phénomènes)」と訳した方がパスカルの言いたかったことに近いのだと前田は述べている⁶。次が断章 S. 480 である。

聖アウグスティヌスは人が不確かなもののために働くのを見た。海の上で、また争いの中で、等々。しかし彼は、人はそうしなければいけないのだということを示す、確率決定の規則 (règle des partis) は見なかった。モンテーニュは人が精神の曲がった人 (esprit boiteux) に腹を立て、そして習慣には全てが可能であることを見た。これらの人たちはみな、諸々の現象 (effets) は見たが、その諸原因は見なかった。彼らは、原因を発見した人たちに対しては、目しか持っていない人々が、精神しか持っていない人々に対するのと同じような関係にある。なぜなら諸々の現象はいわば感覚的であるが、原因は精神にのみ見えるからである。そしてこれらの諸原因は精神に見られているのにもかかわらず、この精神は原因を見る精神に対して、身体感覚が精神に対するのと同じような関係にあるのだ。⁷

パスカルはここで、アウグスティヌスが「人は不確かなもののために働く」と喝破したような、いくつかの事例をまとめて抽象化し命題化する操作を含めて、「これらの人たちはみな、諸々の現象を見た」と呼んでいると思われる。アルベルト・フリゴは、この断章の「現象 (effet)」が最初、ある推敲された観察結果のような意味で用いられていると述べている。それはまるで物理学における「結果 (effet)」が、「自然の秘密」を探るための適切な実験操作の後で出現し把握されるのと類比的である⁸。

人は自然の現象 (effets) を証明するために筋の悪い理由を使うことに慣れていると、良い理由が発見されてもこれを受け入れようと欲しない。与えられた例は血液循環に

ついてであり、なぜ血管はそれを縫合した糸の下では膨れるのかについて理由を与えるためであった。⁹

このように物理学者は、予期せぬ現象に遭遇し、説明を思い描いてそれを生み出す直接の原因を探るのだとフリゴは述べている。そして最終的には、学問の発展を基礎づける一般法則を言い表そうとするのである。他方でパスカルにとって「現象を見た」人々の人間観察は、形式上「どうして？ (D'où vient cela ?)」¹⁰の問いかけがふさわしいような、観察結果の奇妙さ (bizarrierie) の確認から始まる。それは例えば、航海や戦争を見て「人は不確かなもののために働く」(アウグスティヌス)であったり、「人は精神の曲がった人に腹を立てる」(モンテーニュ)、「人は筋の悪い推論や選択をしたと言われると憤慨している」(エピクテトス)であったりする。彼ら「現象」の発見者たちは、このような振る舞い・習慣を感覚的に確認したあとで、「人間は～する」と命題化して述べる。ただしこの段階は、物理学との類比では一般法則の発見に至っていない。さらに精神を働かせて「現象の理由」を洞察する人々も必要だというのがパスカルの立場である。彼らは、人間の世界に観察された珍妙な諸「現象」を規定し可能にしている一般規則とその原因とを、観察し観察される人間そのものに備わった諸機能・諸能力の中に探す。そして彼らの洞察は、「確率決定の規則」に従う合理的人間像であったり、感覚機能に比べると人間の精神的機能はその働きの確かさを自証できないという悲観的人間観を見出す。こうして人は「不確かなもの」のために働かなければならないし、「精神の曲がった人に腹を立て」るのも当然だということまで示せば——それはパスカルが「現象」と呼ぶ——、一見異常な振る舞いに理由を与えて説明したことになる¹¹。

ただしこうして精神を働かせ、「現象」に「理由」を与えるという知的操作は、『パンセ』では一度施せば完了するような構造にはなっていない。例えば次の断章 S. 124 は、一つの「現象」を社会的に再生産していく立場に対して、「正 (Pour)」と応じるか「反 (Contre)」と応じるか、異なる立場に繰り返し言及している。そしてパスカルは、仮に同じ応じ方であっても、その立場に至る理路ないし視座が素朴な場合と、特別な場合とを明確に区別する。そして特別な場合として、一つの「現象」の理由を決定的に説明するような「完全なキリスト者」の視座があることを明示する。パスカルはここで、この「完全なキリスト者」の視座以外によっても、現象の究極的な理由が得られるという発想に異論を提出しているように思われる。

現象の理由。螺旋階段 (Gradation)。〔①〕民衆は高貴な生まれの人々に敬意を表す。

〔②〕半端な学識者は、生まれは人間の長所ではなく偶然にすぎないと述べて、彼ら高貴な生まれの人々を軽蔑する。〔③〕学識者は彼らに敬意を表すが、それは民衆の考えによってではなく、背後の考えによる。〔④〕信者たち、つまり学識に増す宗教的熱心を持つ人々は、高貴な生まれの人々に名誉を与える学識者たちの考察に逆らって、

その人々を軽蔑する。なぜなら信者たちはこの人々を、敬虔さが与える新たな光明によって判断するからだ。〔⑤〕しかし完全なキリスト者たちは、他のいっそう高い光明によって、彼らに敬意を表する。

こうして人の意見は、光明に応じて、正から反へと絶えず転換していく。¹²

「螺旋階段」の喩えは、「光明に応じて、正から反へと絶えず転換していく」ところの人の意見について言われている。フリゴは、この「螺旋階段」は、「本当のことを言うこと (dire vrai)」と「真理を語ること (dire le vrai)」の違いを掘り下げているのだと述べている。確かに、現象の理由を一つ提示することは、民衆の意見の健全さを示すことを可能にする¹³。「どうして」貴族は尊敬に値するのか (①)。それは民衆においては、貴族が尊敬すべき性質を備えており、実際に尊敬に値するからである¹⁴。しかしこれは思い込みである (②)。学識者は別の理由を提示して、民衆の意見を支持し、その健全さを示す (③)。貴族であること自体は偶然の帰結であり、それ自体は尊敬に値しないとしても、彼らを尊敬することで守られる社会秩序は尊敬に値するからだ¹⁵。しかし次の断章が述べているように、パスカルはこの意味で支持され「健全」視される「民衆の意見」は、改めて不健全であると主張する。民衆は「本当のことを言って」いるだけで、自分が語ること (discours) の真理を「掴んで (tenir)」いる訳ではないからだ¹⁶。より健全なのは「真理を語る」立場であり、民衆 (①) よりは学識者 (③) の方である。

〔……〕民衆の意見はいくら健全でも、民衆が空しいということもいつも正しい (vrai)。なぜなら民衆は自分の意見の真理 (vérité) をその在る場所 (où elle est) において感知せず、真理がない場所 (où elle n'est pas) に真理を置いているので、民衆の意見はいつも間違っていてきわめて不健全であるからだ。¹⁷

さらにパスカルは次の断章で、真理の「場所 (lieu)」をその「点 (point)」から区別することで¹⁸、「本当のことを言う」民衆が何を欠いているのか、「真理を語ること」とどう違うのかを明確化している。民衆が欠くのは、考えの正確さである。なるほど民衆の語りは、学識者の語りと同様に真理の「場所」ではありうる。しかし同時に民衆は、その「場所」とは異なった位置である「点」に「真理」があると思い描くこともできる。そこで学識者のように「真理を語る」ためには、こう思い描くことをやめ、精神を働かせて「真理の在る場所」に真理があると考え直す必要がある。

〔……〕民衆の意見は健全なのだが、それは彼らの頭の中で健全な訳ではない。何となれば民衆は真理がない場所 (où elle n'est pas) に真理があると考えから。真理は彼ら民衆の意見の中にあるのだが、それは彼らが思い描く点 (point) にあるのではない。

貴族を敬わなければならないことは本当だが、彼らの生まれが実質的に優れているからという訳ではない、云々。¹⁹

それゆえパスカルは「人は背後の考えを持ち、そこから全てを判断するのでなければならない (Il faut)。しかも民衆のように話しながら」²⁰と述べている。断章 S. 124 の「螺旋階段」は、この規範的命題をパスカルが徹底し、③に続く④と⑤においても同様の知的操作を施したものと理解することができる。つまりパスカルは、続けて③の学識についても思い込みを指摘する立場があることを認めた上で (④)、それでも①と③の立場が支持に値する理由があることを示しているのではないか (⑤)。

〔④〕 信者たち、つまり学識に増す宗教的熱心を持つ人々は、高貴な生まれの人々に敬意を表させる学識者たちの考察 (considération) に逆らって、その人々を軽蔑する。なぜなら信者たちはこの人々を、敬虔さが与える新たな光明によって判断するからだ。
〔⑤〕 しかし完全なキリスト者たちは、他のいっそう高い光明によって、彼らに敬意を表する。

この箇所をメナールは次のように解釈している。まず「敬虔さが与える新たな光明」が人間に、自分たちは神の前で皆平等であること、神の愛 (charité) の偉大さの前には地上的偉大さは全く不十分であることを教える。しかし「完全なキリスト者たち」は、神の国を地上の国と混同しないように気をつける。そして自分たちの罪深い条件に加担する訳ではないにしても、それが自分たちを世界の空しさに服従するように強いるのを悔悛によって認めるのである²¹。そしてメナールは、この段階を「光明」の最高段階に位置付けた上で、同様の「螺旋階段」構造が『パンセ』の他の主題 (法律論) にも見出されると分析している。我々はこの階段を、同じ現象を考察する視点の転換によって登っていく。向かう先の最終地点においては展望は完全であり、現象とその理由がどちらも包み込まれている。そしてこの最高段階の特徴は、パスカルが「子供時代」にもなぞらえる無知であるとメナールは述べている²² (「知恵は我々を子供時代に送り返す。「子供のようにならなければ」」²³)。

以上、本節では「現象の理由」に含まれる「正から反への絶えざる転換」の思想が、終わりのない無限の転換運動ではないという学説を確認した。むしろその転換の限界のうちでパスカルが描いていたのは、人間が精神的ないし宗教的な各「光明」を受け取るそれぞれの段ごとに意見を転じ、自説を補強する新たな理由を獲得していく様子であった。

第三節 断章 S. 132 における二つの主題の連続性

以上、第二節において我々は断章 S. 132 を含むファイルのタイトルである「現象の理由」とは何かを確認した。というのも第一節で断章 S. 132 の概要を確認した際に、未解決の問いを残してしまっていたからである。これらを解くために、「現象の理由」が手掛かりになると思われた。以下本節では、第一節で未検討とした二つの問題を検討する。第一に、パスカルが残した紙片に従って第一と第二の主題を連続して読むなら、我々はどんな連続性を両者に認めるべきなのか。第二に、「現象の理由」における「正から反への絶えざる転換」運動のどこに、S. 132 の第二論点における主張（「人間には自己説得の方法がない」、「真を確信することは絶対に叶わない」という説に対する反論）を位置付けるべきなのか。

考察の前段として、断章 S. 132 の「部分的」素描とも考えられている断章 S. 133 の解釈から始める²⁴。なぜならパスカルは一方で内的会話をよく統御することが重要であると述べながら（S. 132）、他方で心を統御する支配力は我々にはないと述べており（S. 133）、両者の一見した矛盾は「沈黙」に関わる「統御」の意味を確定するのに役立つと思われるからである。

断章 S. 133 は、我々は自分の体調の良し悪しほどは正義の中身について確信していないと述べる。反対に確信を持って正義を論じるエピクテトスの正義論・人間観は、パスカルによれば結論としても論理展開としても誤りを含んでいる。

〔断章 S. 133〕現象の理由。エピクテトス、「君は頭痛なんだね」と言う人々。これは同じではない。我々は体調については確信しているのだが、正義についてはそうしていない。そして実際、エピクテトスの正義は愚かなものだった。しかし彼〔エピクテトス〕はその正義を証明するのだと信じてこう言った。「我々の支配力（*puissance*）の下にあるか、否か」と。しかし彼は心を統御する支配力（*pouvoir de régler le coeur*）は我々にはないのだとは気付かなかったし、その力のことをキリスト教徒がいることから結論するのも間違っていた。²⁵

この断章では、まずエピクテトスの引用が、体調の良し悪しは我々にとって自明であることを示している。体調がいい時に他人から憐れまれてもなんということはない。同様に、もし哲学を通して内的に充実しているならば、我々は名誉と富を持つ他人から何と憐れまれても気に病むことはないはずである。エピクテトスは『語録』の中で次のように述べている。「私の頭は健康だが、皆から頭痛もちだと言われている。それがどうしたというのだ。私に熱はない。それなのに発熱しているかのように憐れまれている。「気の毒に。そんなに長い間、熱が引かないのかい」すると私も陰気な顔をして、「ええ、本当に長いこと、具合がよくありません」と言う。「一体、きみはどうなるのだろう」「神のおぼしめしのままに」と答えて、私は心の中で、私を憐れむ者を笑うのだ」。この時のエピクテトスの対話の相手は、名誉と富を得られない哲学の弟子である。弟子は、他人から憐れまれることを気にして、苦

しんでしまう。「どうして」であろうか。師はこの疑問に対して「反」の立場をとり、続けて「今の君の場合も、同様に振る舞えないことはないだろう」と述べる²⁶。エピクテトスにとっては、苦しみは、他人の発言よりも哲学の不徹底に由来するのである。このようにエピクテトスが構想した倫理学の基本原理は、一方で我々の支配下にある意志や判断、表象などを理性に従って規制しながら、他方で支配下にないもの（身体の調子、財産、地位、名誉など）については無関心になる修練を積むということだった²⁷。しかしパスカルは、エピクテトスに反論して、正義はこのように明快には語れないと主張する。むしろパスカルが支持するのは、前節で述べた「螺旋階段」の運動に従って、弟子の立場を肯定する学識である。この説によれば、我々の内的支配力は、神の補助なしでは意志や判断、表象には及ばない。エピクテトスの弟子はキリスト者ではないから、彼の苦しみは「健全」なものである。もしキリスト者に反論されたとしても、「完全なキリスト者」は罪と無能力の自覚からこの弟子の意見を支持するであろう。議論をこのように整理するならば、断章 S. 133 における「心を統御する (régler) 支配力は我々にはない」は、「螺旋階段」上の③および⑤の立場で認められる学識であると考えることができる。

ところで、断章 S. 132 は二つの疑問を提出していた。「どうして我々は〔……〕精神の曲がった人には腹を立てるのか」。なぜ我々は「〔……〕筋の悪い推論や選択をしたと言われると憤慨しているのか」。これらの疑問は、「螺旋階段」上の②の立場から発せられるものであろう。即座に③の立場が、「現象」を正当化するような説明を提供する。断章 S. 132 をもう一度部分的に引用しよう。

〔断章 99〕〔……〕その原因はといえば、我々が頭痛でなく、またその足も不自由でないことは確かなのに、真を選んでいるのだとはそれほど確信が持てないからなのだ。

続けてパスカルは、この段階では「大胆かつ困難」と思われる規範的命題「人は自らの光明を他の大勢の光明に増して好まねばならぬ (il faut)」に言及し、「断章 99」に相当する箇所を終えている。ここでパスカルは、その「大胆かつ困難」な実践を容易かつ当然とするような、一段高い光明の存在を暗示しているように思われる。そのような高次の光明に照らされた人々として、信者たちを挙げることができる。この立場からすれば、当初の疑問は不合理に映ることであろう (④)。彼らは感覚を通して宗教的确实性を享受しているので、憤慨する理由を持たないからである（「心の感覚を通じて神が宗教を与えた人々は幸福である」²⁸）。続けて「断章 99 の 2」の箇所は、「螺旋階段」上の③に戻って、当初とは別の角度から「現象」を説明しつつ、支持しようとする。他者の言葉 (③) に加えて、自分の言葉も人間精神を惑わすことがあるのである (③a)。以下に改めて引用する。

〔断章 99 の 2〕人はこうして愚かだと言われてそれを信じさせられる。また同じことを我々は自分自身に言って、自分は愚かだと自らに信じさせる。それも人は彼だけで内的会話をしているからであり、これをよく統御することが重要である。「悪しき交際は善き風儀を損なう」。できる限り (autant qu'on peut) 沈黙に留まらなければならず、我々が真理であると知っている神とだけ対話するのでなければならぬ (Il faut)。そうして我々はこれ [=真理] を自分自身に説得するのである。

しかしここでパスカルは、前半部までと全く同じ「螺旋階段」を辿り直しているわけではない。今度の「現象」はより過激になっている。「どうして」人は自分は愚かだと信じてしまうのか (②)。それは、人間が内的会話をしているからである (③a)。従って、「よく統御する (régler) ことが重要である」以下、沈黙を勧める規範的命題は、「断章 99」の箇所に倣って、「螺旋階段」上で一段高次の光明 (④a) を存在を前提とした発言であると解釈することができる。共通点は、この光明も従来の「信者」の光明も、どちらも聖書の知識に依拠している点である。相違点は、「断章 99」の戦略は未信仰段階では実現困難と見られていたのに対し、「断章 99 の 2」においてはその困難性の強調が緩められている点である。代わりに、沈黙の指示に限って「できる限り (autant qu'on peut)」という譲歩が付いている。

この「できる限り」を断章 S. 133 の「我々には力はない (il n'est pas en notre pouvoir)」と併記してみると、その特異性が際立つ。では一方の断章 S. 133 が「心を統御する支配力は我々にはない」と断言して①の立場を正当化するようでありながら、他方の S. 132 が「できる限り」と譲歩することで①の立場から隔たりつつ、信者の立場「④a」に接近しているように見えるのはなぜだろうか。また、この違いは何を意味するのだろうか。それは、沈黙においては、信者の立場「④a」と、罪を自覚した完全なキリスト者の立場「⑤a」とが、内容的に区別し難いことを意味するのではないか。従来の「螺旋階段」であれば、完全なキリスト者は、内的会話を不合理だと考える信者の意見を、再度否定する立場にある。しかしそもそも聖書は「悪しき交際は善き風儀を損なう」と述べているだけで、交際つまり会話そのものを否定している訳ではない。従って信者の立場からも、内的会話それ自体の否定は出てこない。それでも沈黙が規範的に推奨されるのは、沈黙が会話の否定ではなく、あくまで「悪しき交際」を回避する手段として考えられているからであろう。沈黙の指示に付随する「できる限り」の譲歩は、内的会話の原理自体を否定せず包み込む立場を代表していると考えられる。この意味で、「できる限りの沈黙」においては、信者の立場と完全なキリスト者の立場とが、溶け合って同一化しているのではないか。断章 S. 133 における「心を統御する支配力は我々にはない」は学識者の発言である一方で、断章 S. 132 における「〔内的会話を〕統御することが重要である。〔……〕できる限り沈黙に留まらなければならず〔……〕」の指示は、学識者から一段高次の、しかし従来の「螺旋階段」には収まらない特殊な立場からの発言であると考えられる。

第一節で分析した通り、断章 S. 132 末尾の論旨は、人間には自己説得の方法があるので真なるものを確信することは絶対に叶わないという発想への反論であった。この主張は、「正から反への絶えざる転換」運動の中では、以上の特殊な段階の上に位置付けることができるだろう。この段階で「できる限り沈黙する」ことは、一方で実践としては精神を使って「現象の理由」を考えることの螺旋的連続性のうちに位置付けられ、学識者が認識する内的会話の人間観に絶えず同調していると考えられる。他方で指示としては、確かに一段高次ではある宗教的光明を前提としているが、「正から反への絶えざる転換」運動におけるような「反」の立場の実現を指示しているわけではない。このように断章 S. 132 の「沈黙」は、螺旋的ではあるが「反」ではない微妙な位置付けを与えられていると思われる。

おわりに

以上、本稿では人間が「沈黙して」何かをすることの意味と特異性を、特に断章 S. 132 に絞って考察した。従来の「現象の理由」分析における「螺旋階段」構造は、「正から反への絶えざる転換」を実践し、ある主張の否定・再否定の連続を通して最終的に好ましい分析視点を獲得するという手続きをとっていた。しかし「できる限り沈黙して」の指示はこの否定・転換構造に回収されるものではなく、この意味で「現象の理由」ファイルの中でも特異な人間表象であると考えられる。「できる限りの沈黙」は、直前までの人間学的考察が支持する脆弱な人間観をそのまま高次の宗教的光明によって捉え直し、この光明の立場との潜在的な接続可能性を残す働きをしていると思われる。

第一節末尾では学説を検討し、「沈黙」を「イエスの秘義」(B. 553) 的な黙想の前準備として位置付けるようなブランシュビックの解釈が妥当であるかどうかを問題にした。以上の考察から、この解釈はより妥当であると思われる。ただし「沈黙」は同時に、断章 S. 132 前半から「内的会話」の人間観に至るまでの螺旋的な精神運動から断絶するのではなく、それを前提とし必要とする実践であると思われる。

凡例

本稿における『パンセ』の引用は、セリエ校訂本（初版 1976 年）のフェレロル注釈付き普及版に依拠し、引用者が試訳した。脚注ではフランス語原文と断章番号を記す。断章番号は、上記のセリエ校訂本の場合は記号 S、他にラフュマ校訂本の場合は L、ブランシュビック校訂本の場合は B に続けて断章番号を記す。既訳を参照し、引用した場合は注記した。

注

¹ S. 233 (L. 201) « Le silence éternel de ces espaces infinis m'effraie » (Pascal, *Pensées*, éd. Philippe Sellier, présentation et notes par Gérard Ferreyrolles, Paris, Librairie Générale Française, coll. « Le Livre de Poche », 2000, p. 172).

² 『パンセ』本文中の「沈黙」の用例を並べると以下の通りである。S. 132「できる限り沈黙に留まらなければならず、神とだけ対話するのでなければならぬ」；S. 230「思い上がってそれらを探求するよりも、沈黙して考察する気になるだろう」；S. 233「無限の空間の永遠の沈黙が私を恐れさせる」；S. 454「もしこの沈黙がその効果をもたらさなかったなら、〔…〕」；S. 746「沈黙は最大の迫害である」；S. 751「かくして黙想会や〔靈的〕指導、沈黙等々の証は〔……〕これらの人々に対してしか立証されない」。このうち S. 746 と S. 751 は「1658 年 6 月の企画」構成ではなく、未刊テキスト集成の「ペリエ写本」に含まれており、特別の解釈手続を要するため本稿の対象から除外した。

³ 例えばブランシュビックは、前半三分の二を第二章「神なき人間の惨めさ」に配置し、後半三分の一（塩川訳における「断章 99 の 2」に相当する部分）は切り話して第七章「道徳と教義」の章に分類した。塩川はブランシュビックとラフュマの断章分けを踏襲し、「断章 98」(L. 98 = B. 80)、「断章 99」(L. 99 = B. 80)、「断章 99 の 2」(L. 99 = B. 536) と三つに分けた。このうち、「沈黙」を含むのは「断章 99 の 2」だけである。

⁴ S. 132 (L. 98 et 99) « D'où vient qu'un boiteux ne nous irrite pas et un esprit boiteux nous irrite? A cause qu'un boiteux reconnaît que nous allons droit et qu'un esprit boiteux dit que c'est nous qui boitions. Sans cela nous en aurions pitié et non colère. Épictète demande bien plus fortement : pourquoi ne nous fâchons-nous pas si on dit que nous avons mal à la tête, et que nous nous fâchons de ce qu'on dit que nous raisonnons mal ou que nous choisissons mal. Ce qui cause cela est que nous sommes bien certains que nous n'avons pas mal à la tête, et que nous ne sommes pas boiteux, mais nous ne sommes pas si assurés que nous choisissons le vrai. De sorte que, n'en ayant d'assurance qu'à cause que nous le voyons de toute notre vue, quand un autre voit de toute sa vue le contraire, cela nous met en suspens et nous étonne. Et encore plus quand mille autres se moquent de notre choix, car il faut préférer nos lumières à celles de tant d'autres. Et cela est hardi et difficile. Il n'y a jamais cette contradiction dans les sens touchant un boiteux. L'homme est ainsi fait qu'à force de lui dire qu'il est un sot il le croit. Et à force de se le dire à soi-même on se le fait croire, car l'homme fait lui seul une conversation intérieure, qu'il importe de bien régler. *Corrumpunt bonos mores colloquia prava*. Il faut se tenir en silence autant qu'on peut et ne s'entretenir que de Dieu qu'on sait être la vérité, et ainsi on se le persuade à soi-même ». 引用内括弧〔 〕は引用者による。訳文のうち、聖書の羅文は塩川訳を参照し、引用した。最後の文は、塩川訳では「こうして、神が心に刻まれるようになる」となっている。しかし「心」は本断章ではなく、番号が一つ遅い S. 133 に「心を統御する力は我々にはない」として登場

する。では、断章 S. 132 における自己説得（se persuader à soi-même）の成功は「神が心に刻み込まれること」を意味するのだろうか。本稿では、以上の塩川訳の妥当性に関わる論点についても部分的に第三節で検討する。

⁵ Frigo, Alberto. *L'évidence du Dieu caché. Introduction à la lecture des Pensées de Pascal*, Mont-Saint-Aignan, Presses universitaires de Rouen et du Havre, Centre national d'enseignement à distance, 2015, p. 105.

⁶ Morino, Jean. « La Raison des effets », *Méthodes chez Pascal : actes du colloque tenu à Clermont-Ferrand, 10-13 juin 1976*, Paris : PUF, 1979, p. 493-496.

⁷ S. 480 (L. 577) « Saint Augustin a vu qu'on travaille pour l'incertain : sur mer, en bataille, etc., mais il n'a pas vu la règle des partis, qui démontre qu'on le doit. Montaigne a vu qu'on s'offense d'un esprit boiteux et que la coutume peut tout, mais il n'a pas vu la raison de cet effet. Toutes ces personnes ont vu les effets, mais ils n'ont pas vu les causes. Ils sont à l'égard de ceux qui ont découvert les causes comme ceux qui n'ont que les yeux à l'égard de ceux qui ont l'esprit : car les effets sont comme sensibles, et les causes sont visibles seulement à l'esprit. Et quoique ces effets-là se voient par l'esprit, cet esprit est à l'égard de l'esprit qui voit les causes comme les sens corporels à l'égard de l'esprit ». 前田訳 (B. 234) を参照し、部分的に引用した。確率決定の規則 (règle des partis) の部分は塩川訳 (L. 153; L. 154; L. 418) および前田訳 (B. 234) を参照し、前田訳 (B. 234) 引用した。

⁸ Frigo. *ibid.*, p. 105.

⁹ S. 617 (L. 736) « Lorsqu'on est accoutumé à se servir de mauvaises raisons pour prouver des effets de la nature, on ne veut plus recevoir les bonnes lorsqu'elles sont découvertes. L'exemple qu'on en donna fut sur la circulation du sang pour rendre raison pourquoi la veine enfle au-dessous de la ligature ».

¹⁰ S. 116 (L. 81)

¹¹ Frigo. *ibid.*, p. 106.

¹² S. 124 (L. 90) « Raison des effets. Gradation. Le peuple honore les personnes de grande naissance, les demi-habiles les méprisent, disant que la naissance n'est pas un avantage de la personne, mais du hasard. Les habiles les honorent, non par la pensée du peuple, mais par la pensée de derrière. Les dévots, qui ont plus de zèle que de science, les méprisent, malgré cette considération qui les fait honorer par les habiles, parce qu'ils en jugent par une nouvelle lumière que la piété leur donne. Mais les chrétiens parfaits les honorent par une autre lumière supérieure. Ainsi se vont les opinions succédant du pour au contre, selon qu'on a de lumière ». ①～⑤は、Jean Mesnard, *Les Pensées de Pascal*, 2^{ème} édition revue et augmentées, Paris, SEDES, 1993, p. 206 を参考に、引用者が訳文に

加筆した。訳文は「熱心」及び「他のいっそう高い光明」の部分について前田訳を参照し、引用した。

¹³ Frigo. *ibid.*, p. 110.

¹⁴ Jean Mesnard, *Les Pensées de Pascal*, 2^e édition revue et augmentées, Paris, SEDES, 1993, p. 206.

¹⁵ Mesnard, *ibid.*, p. 206.

¹⁶ Frigo. *ibid.*, p. 110.

¹⁷ S. 127 (L. 93) « […] il demeure toujours vrai que le peuple est vain, quoique ses opinions soient saines, parce qu'il n'en sent pas la vérité où elle est et que, la mettant où elle n'est pas, ses opinions sont toujours très fausses et très malsaines ». 「真理をその在る場所において感知せず、真理がない場所に真理を置いているので」の部分について前田訳を参照し、引用した。

¹⁸ Frigo. *ibid.*, p. 110.

¹⁹ S. 126 (L. 92) « […] encore que les opinions du peuple soient saines, elles ne le sont pas dans sa tête. Car il pense que la vérité est où elle n'est pas. La vérité est bien dans leurs opinions, mais non pas au point où ils se figurent. Il est vrai qu'il faut honorer les gentils-hommes, mais non pas parce que la naissance est un avantage effectif, etc ».

²⁰ S. 125 (L. 91) « Raison des effets. Il faut avoir une pensée de derrière, et juger de tout par là, en parlant cependant comme le peuple ».

²¹ Mesnard, *ibid.*, p. 206.

²² Mesnard, *ibid.*, p. 207.

²³ S. 116 (L. 82) « […] La Sagesse nous renvoie à l'enfance. *Nisi efficiamini situ parvuli* ».

²⁴ Descotes et Proust, “Fragment *Raisons des effets* n° 17 / 21,” *L'édition électronique des Pensées de Blaise Pascal*, <https://www.penseesdepascal.fr/Raisons/Raisons17-moderne.php?r1>. « Ce fragment doit être lié au suivant, Raison des effets 18, qui en est sans doute partiellement l'esquisse ». ここで最初の « ce frangment »は「断章 S. 132」を、次の « Raison des effets 18 » は「断章 S. 133」を指す。

²⁵ S. 133 (L. 100) « Raison des effets. Épictète, ceux qui disent : vous avez mal à la tête, ce n'est pas de même. On est assuré de la santé, et non pas de la justice, et en effet la sienne était une niaiserie. Et cependant il la croyait démontrer en disant : Ou en notre puissance, ou non. Mais il ne s'apercevait pas qu'il n'est pas en notre pouvoir de régler le coeur, et il avait tort de le conclure de ce qu'il y avait des chrétiens ».

²⁶ ÉPICTÈTE, *Les Propos d'Épictète, recueillis par Arrian auteur grec son disciple*, traduits du grec en français par F. Jean de S. François, dit le P. Goulu, religieux feuillant, dernière édition, Paris, Jean de Heuqueville, 1630. 塩川訳『パンセ（上）』断章 100 の注（2）より、エピクテトス『語録』第 4 巻 6 章の塩川訳を参照し、引用した。

²⁷ セリエ版『パンセ』（2000）のフェレロル注を参照し、引用した。この注の訳文は塩川訳『パンセ（上）』断章 100 の注（2）を参照し、引用した。

²⁸ S. 142 (L. 110) « [……] ceux à qui dieu a donné la religion par sentiment du cœur sont bien heureux [……] ».

参考文献

一次史料

Pascal, *Pensées*, éd. Philippe Sellier, présentation et notes par Gérard Ferreyrolles, Paris, Librairie Générale Française, coll. « Le Livre de Poche », 2000.

パスカル『中公バックス 世界の名著 パスカル』前田陽一・由木康訳（中央公論社、1978 年）。

パスカル『パンセ』上・中・下巻、塩川徹也訳（岩波書店、2016 年）。

二次文献

Descotes et Proust, *L'édition électronique des Pensées de Blaise Pascal*, <https://www.penseesdepascal.fr/>.

Épictète, *Les Propos d'Épictète, recueillis par Arrian auteur grec son disciple*, traduits du grec en français par F. Jean de S. François, dit le P. Goulu, religieux feuillant, dernière édition, Paris, Jean de Heuqueville, 1630.

Frigo, Alberto. *L'évidence du Dieu caché. Introduction à la lecture des Pensées de Pascal*, Mont-Saint-Aignan, Presses universitaires de Rouen et du Havre, Centre national d'enseignement à distance, 2015.

Mesnard, Jean. *Les Pensées de Pascal*, 2^{ème} édition revue et augmentées, Paris, SEDES, 1993.